

崔恩英氏の発表論文に対するコメント

金鎬貴* (韓国 東国大学校)

論者が序文で述べているように、本論文は、伝統的な三論学の非因非果の中道仏性と、三種仏性と乗の意味を媒介として成立した一乗仏性説との間に違いがあるという点を認め、一乗仏性という用語を活用した吉蔵の立場を中心として、その相違について考察を行っている。しかし最終的には、論者は、吉蔵の一乗仏性は一乗の意味を正法中道に置いているという点で、三論の中道仏性と関連を持った仏性理論であるという点を確認している。

初期仏教は、ブラフマンの分身であるアートマンが一切衆生に内在するという理論を正面から批判する。すべての有為の存在は無常であり、不滅の実体はなく、我の本体もなく、我の存在もないと説く。しかし縁起と仏性との関係について『大乘涅槃経』は釈尊が入滅した意義を仏性の概念を通して新たに展開した。

如来の方便によって仏性を開発し、妙果を得るということが大乘教学における一般的な主張である。たとえば「衆生それぞれは如来の性質を持っているが、無量の煩悩に覆われており、自ら知ることができずにいる。それを如来が方便により開花させ、自ら自身に如来の性質があることを知り、楽しみ信じて受け取るようにする」という場合に、仏性は善悪のいずれにもなりうる潜在的な可能性を宿しており、いわゆる無性、無相、無我と言えるであろう。そして仏性とは、煩悩と対立する物としての存在ではない。仏性とは、一切万法の性質が不定であることを意味するものであり、万法のほかに仏性という別の存在があるのではない。万法が縁に会い、様々に変化していくことが仏性である。したがって仏性は無自性空であり、縁に随ってどのような現象としても現れるのであり、一つの固定した性格として限定することができない。こうして、一切万法の実体である無自性は、衆生の妄情に会えば迷界となり、仏の智慧に会えば悟界となる。煩悩ともなり、菩提ともなるのは、仏性が無自性空であるからで

*김호귀 (キム・ホグイ)。東国大学校仏教学術院 HK 研究教授。

ある。

仏性という概念は、思想史的に見て、般若空観を発展・展開させた究極的な了義であり、中観思想自体とは区別される般若空観の方便説である。しかし究極的には、般若空観の本意を開顕しようというものである。ただ問題は、般若空観を開顕するための方便として、どうして悉有仏性という概念が、ことさらに大きく提唱されねばならなかったのかという点である。これに対して『宝性論』では、仏性思想が説かれねばならなかった歴史的・教理的な必然性を明示している。すなわち、すべての『般若波羅蜜多経』で、雲・夢・幻のように、一切の認識対象は畢竟、空であると説かれているにも関わらず、なぜ悉有仏性を説示するのかという点に対して、悉有仏性の場合、本性清浄な仏性という点を浮かび上がらせている。よって悉有仏性は以後、「法身遍満」「一切平等」「如来の種性」という三つの側面から解釈されてきた。

進んで仏性の概念は、般若空観で説明されている了義としての空性に基づいて、大乘菩薩道の実践を積極的に志向するものとして強調された。すなわち衆生に自ら劣等感を捨てて菩提に進ませ、他人も菩提へと進むことを肯定する、すなわち、空について空性の清浄性を理解させるということである。

【発表の要旨】

本稿で論者は、吉蔵の一乗仏性が真谛訳『撰論』の乗が持つ三つの意味、真如・万行・仏果がそれぞれ仏性の自性・随順・結果の意味に由来することを推論的に説明する。そして、そのような仏性が、吉蔵の一乗仏性とどのような点で関連するのかをいくつかの大乗経論を通して考察している。

『涅槃経』からは積極的に経文を通して大涅槃がすなわち一乗であり、一乗は仏性であるということを説明する。さらに進んで、十二因縁・仏性・第一義空・中道・仏果・涅槃が相に通ずる概念であることを明らかにする。そして、『法華経』および、その注釈書では世親の注釈書を通して仏性と一乗、および法身が関連していることを述べる。『勝鬘経』では、一乗の究極的な境地を涅槃の概念として見なし、その涅槃が仏性と関係すると述べている。

それに続いて、これら大乗経論に由来したと見られる一乗仏性について、『大乘玄論』を通して確認している。そして、吉蔵において、一乗の体は『大乘玄論』を通して正法中道と解釈され、一乗の相は『勝鬘宝窟』を通して無分別相と見なされ、一乗の用は、用は福德と智慧とを発生させる不二中道であり、菩薩道の立場であると説明

されている。

一乗と仏性との直接的な結合は『法華経』と『法華論』に対する吉蔵の注釈にだけ見出されるという点を述べ、その証拠として『法華統略』および『法華玄論』などに言及し、『涅槃経』『勝鬘経』および『十二門論疏』などでも、一乗の仏性に対する説明があることを述べ、そのような思想の根底に、般若中観に対する理解が介入していることを考察する。

これにより論者は、中道としての一乗仏性に対して「吉蔵においては、根本仏性は諸法実相としての空であり、これがまさしく一乗である。すなわち一乗は、三乗と対比される一乗ではなく、三論学の宗旨である中道・実相空の意味を持った概念としての一乗である。一乗という用語は『涅槃経』『勝鬘経』『法華経』などから借用したものと言えるが、その内容を三論学の宗旨と会通して用いているのである」と述べ、中道仏性がすなわち仏性の中道であることを説き、一乗と仏性との相関性を論じている。

【問題提起】

本稿において、仏性が法身であり、第一義空であり、法身であり、十二縁起であり、中道であることを説明するに当たっては、まず仏性と涅槃の関係についての必要最小限の説明がなされるべきである。なぜなら、仏性と涅槃は『涅槃経』を構成する二つの軸だからである。このような点で元暁は『涅槃経宗要』で涅槃門と仏性門とに分けている。

【指摘事項】

1. 『勝鬘経』からの引用文の解釈

…一乗道を説くことは、如来が四つの無畏を成就し、獅子吼を説くことである。如来が彼らに随って説こうとするところを方便として説くことが、すなわち大乘である。三乗がなく、三乗であるということは一乗に入ることである。一乗というのはすなわち第一義乗である。（注 19 を参照）

下線部は、「如来が、その述べようと思うところに従って方便として説くものであるならば、それはすなわち大乘であり、三乗ではありません。従って三乗は一乗に入っており、その一乗はすなわち第一義乗になります」と読むべきではないか。

(原文)「説一乗道、如来四無畏成就師子吼説。若如来隨彼所欲而方便説、即是大乘無有三乘。三乘者、入於一乘。一乘者、即第一義乘。」

2. 『勝鬘宝窟』からの引用文の解釈

一乗の姿。『楞伽經』第四卷に云う、「何が一乗の姿であるか？ 如實に一乗道を覺知するため、能取・所取の境界を分別せず、このような諸法の相を起こさないままで止まり、一切諸法を分別しないために一乗道の姿であるという」と。
(注 33 を参照)

下線部は、「このようなすべての法相に対する執着も起こさず」と読むべきではないか。

(原文)「不生如是諸法相住。」

3. 上記の2の箇所について、『勝鬘宝窟』の文章(注 33 参照)と、引用される『楞伽經』の文章(注 34 を参照)は、一つに整理した方がよいのではないか。

4. 「おわりに」の部分に、

中道仏性が三論学の傳統的仏性説であるとすれば、一乗仏性は吉蔵が様々な經典を注釈しながら經典間の優劣を退け、三乗歸一の精神を再確認しようとして提出した仏性説であると言える。(たとえ一乗仏性の根拠は『涅槃經』に求めることができるにしても、三種仏性説に乗の意味を媒介として結合させ、三論学の宗旨を一乗に会通させて完成した仏性論であると言うことができ、これは多くの仏性説の中でも吉蔵の独創であると判断できる。)

とあるが、括弧で囲った部分は、総結ともいうべきものであるから、もっと表現を推敲する必要があるのではないか。

(翻訳担当：佐藤厚)